

バレエを習う子供を持つ 母親の認識

井手真理

1. はじめに

近年日本人男性ダンサーが新たなバレエファンを獲得し、大人のバレエクラスの加熱ぶりがテレビや新聞で紹介される等、日本はバレエの裾野が見る側・踊る側ともに拡大している様に思われる。

筆者¹⁾は98年、日本のバレエ教師の教授に必要な知識に対する認識調査で、日本では教授に関する公的基準は無く、実際、十分な期間に体系的な教授用の学習をした者は多くないと指摘した。

里見²⁾は日本におけるバレエ団経営の問題点の一つに、クラシックバレエを含む西洋舞踊の集団は、教師・弟子という子弟関係上に成立しており、教授に対する謝礼で経済活動が成り立っている封建制支配というものをあげている。

バレエは多くの場合幼少期に始めるが、上述の「教授に対する謝礼」は生徒の親が払う。換言すれば日本のバレエ経済は、親が多くを支えている。マール³⁾はバレエとは多くの少女やその両親には美しい魔術的な言葉だと述べ、立地の良さや金額に囚われず良い背景を持つ優秀な教師を探す意欲を持って、注意深く選ぶ様に忠告している。また、子供が誠意ある教師の基で習っているかを確認する事を勧めている。

親のバレエへの認識は子供や、その教師にも何らかの影響を与えるだろう。日本の母親はマールの述べる様な視点を備えているだろうか。

過去にこの種の調査は見あたらない。そこで本研究では、バレエを習う子供の親、特に現在の日本で育児を主に担う「母親」がバレエをどのように位置づけているかという認識を中心に調査、実態の一部を明らかにすることで、上述の疑問の答えを探り、日本のバレエ教育向上の手掛かりとしたい。

2. 調査方法

郵送法とインターネットのホームページ(H P)による質問紙調査。調査は内田⁴⁾との共同研究による。質問項目は事前インタビュー(10名程度)を参考に作成。(資料別添)

郵送：北海道・和歌山・愛知の教授所生徒の母親270名に教師を通して配布、期間は'99. 12. 13～23。回収率57%，N=155(Y群とする)。

インターネット：Y群の地域的な偏りを補うため、H P上に同一の質問を掲載、回答を収集。期間'99. 12. 16～2000. 1. 31。N=97(N群とする)。

分析は比較1・2にて回答の差の検定を行った。

比較1：Y群・N群，比較2：子供のバレエ経験年数7年未満群・7年以上群⁵⁾

3. 結果と考察(資料別添)

比較1・2で回答に統計的有意差がない質問項目(各群に共通な質問)から、次の事がわかった。

(1) 回答者は日本のバレエは文化としての位置付けは未熟だと認識する一方でバレエへの憧れや子供の情操に良い、というイメージを持つ。(表1, 2.)

(2) レッスンには「背筋がまっすぐになる」や「優雅な身のこなし」を期待する比率が上位。「レッスンが身体発達に及ぼす影響」への関心も「大変ある」と「ある」の合計で96%で、関心は非常に高いが、実際にそれに関して情報収集をしているか、その視点で子供の様子を観察し、レッスンを見学しているのかについては今後調査の必要がある。

(3) 鑑賞経験(表3.)では、代表的な外来バレエ団を劇場で一つも観ていない母親は6割以上に及び、「習う事」と「本場の舞台を劇場で観る事」には距離があると推察される。

表1. 比較1・比較2で回答傾向が共通の質問項目(抜粋) その1

Q13. バレエに関する認識	大いに思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない
1. バレエに対する憧れをもっている	52.2%	37.1%	8.0%	2.8%
4. バレエは情操教育として優れている	55.4%	40.2%	3.2%	1.2%
5. バレエは日本で文化として定着している	5.6%	39.1%	47.6%	7.7%
6. 日本は技術表現力ともに世界に通用する様なバレエの上演レベルの高い国だ	8.5%	37.5%	50.4%	3.6%
Q12. 次の項目に関心がありますか	1. 全くない	2. あまりない	3. 関心がある	4. 大変ある
1. レッスンが身体発達に及ぼす影響	1.6%	2.4%	35.7%	60.3%
2. 子供のレッスンの理解度	1.2%	6.3%	51.2%	40.9%

表2. 比較1・2で回答傾向が共通の質問項目(抜粋) その2

Q4. バレエを始めたきっかけ(複数回答)	
2. 母親の子供時代の憧れ	34.7%
6. 近所に教室があった	27.1%
Q6. プラスになると期待した事(1位)	
1. 背筋がまっすぐになる	34.1%
2. 身のこなしが優雅になる	16.3%

表3. 回答者の鑑賞経験

Q14-4. 代表的なバレエ作品を劇場では観たことがない	38.5%
Q14-5. 代表的な外来バレエ団を劇場では観たことがない	62.7%

4. まとめ

上述の結果から判断して、母親は教授所のバレエ教師を正しく評価できる鑑識眼を十分に備えているかどうか懸念される。今後、質問項目の改善、地域的な偏りの排除、回答者へのダイレクトな配布により一歩踏み込んだ調査が必要である。

1) 井手真理 「バレエ教授に必要な知識に関する研究—日本のバレエ教師の認識」お茶の水女子大学大学院修士学位論文、1997

2) 里見悦郎 「日本型バレエ社会の構造」比較舞踊研究、1998

3) サリア・マール 「はじめてのバレエレッスン1・2」新書館、1996

4) 内田治・井手真理 「ウェブ調査と郵送法のアンケート調査比較」2000

5) 幼稚園年長から開始したモデルを想定し、習得態度に差が出やすく、学校環境等変化の大きい経験年数7年を1つの区切りとした。